

鬼ヶ洞と鬼腰掛岩：酒吞童子と八瀬童子の祖先の鬼の旧跡

in 京都洛北八瀬 & 比叡山延暦寺

WisdomMingle.com

倉田 幸暢

はじめに

本稿では、酒吞童子や八瀬童子の祖先の鬼にゆかりのある、鬼ヶ洞^{おにがほら}という洞窟や、鬼腰掛岩^{おにのこしかけいわ}という岩を紹介します。具体的には、それらの場所へ行くための道のりを動画と地図で紹介します。また、古文献に記されているそれらの場所についての記述も紹介します。（※本稿の最新版は、つぎの URL でご覧いただけます。 <https://wisdommingle.com/?p=27610> ）



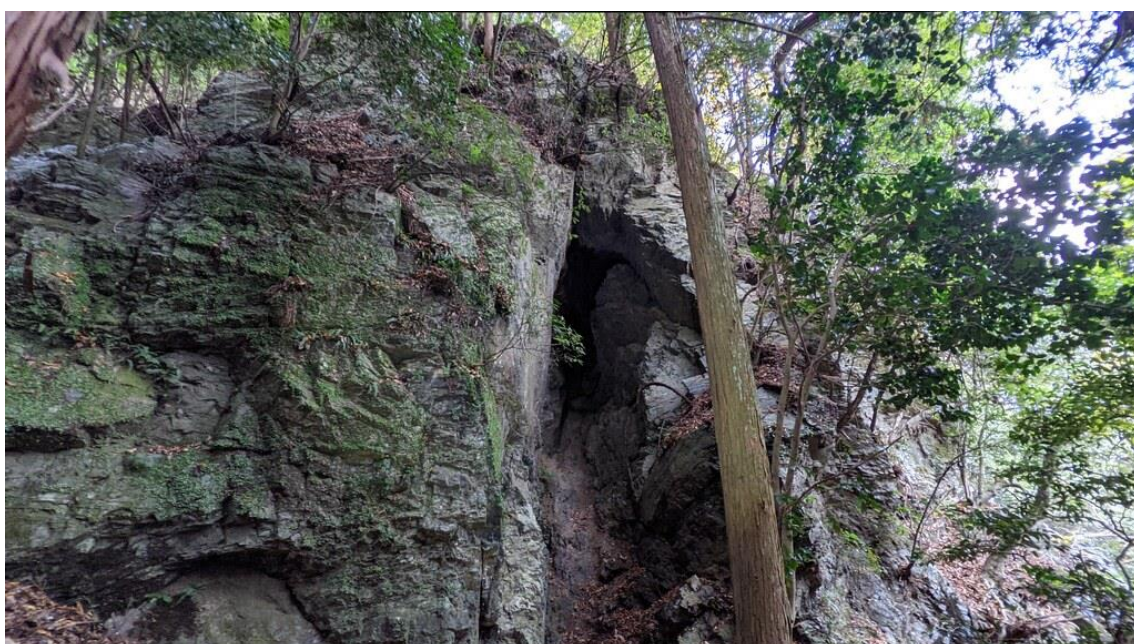
地図 1 八瀬童子旧跡周辺地図

なお、本稿で引用している古文献の引用文は、読者が読みやすくなるように、引用者が適宜、文章に手を加えています。具体的には、旧仮名遣いを、現代仮名遣いに変えたり、一部言葉を変更・追加したり、句読点を変更・追加したり、ふりがなを追加したり、旧字体の漢字を新字体に変え

たり、漢文を書き下し文にしたり、一部間違いだとおもわれる文字を別の文字に変更したり、読みやすくなるように適宜、改行を加えたりしました。また、引用文のなかの〔〕(亀甲括弧)内の言葉は、引用者による注記です。

本稿で引用している古文献の記述の一部には、現在では差別的と考えられる表現が見られる部分があります。ですが、筆者には差別を助長する意図はなく、資料的意義を考慮して記載していることをご了承いただければ幸いです。

鬼ヶ洞(おにがほら)



やせ おにがほら
八瀬の鬼ヶ洞

かつて、酒吞童子や、鬼童丸(鬼同丸)や、八瀬童子の祖先である鬼が隠れ住んだとされている鬼ヶ洞という洞窟が、洛北(京都市北部)の八瀬^{やせ}の里の西側の山の中腹にあります。その鬼ヶ洞^{おにがほら}までの道のりを、下記のような地図にしてみました。(下記の道のりをたどっていく様子や、鬼ヶ洞^{おにがほら}の様子を撮影した動画は、つぎの URL でご覧いただけます。

<https://wisdommingle.com/?p=27610>)



地図 2 ^{やせ} ^{おにがほら} 八瀬の鬼ヶ洞への道のり

^{おにがほら} 鬼ヶ洞がある場所のおおよその緯度経度は、35.082993, 135.814054 です。^{おにがほら} 鬼ヶ洞は、標高300メートルほどの場所にあります。江戸時代前期の儒学者である^{はやしら ざん} 林羅山は、鬼ヶ洞の大きさを、「高さ約6メートル、深さ約9メートル」としています。かなりおおざっぱな数値にはなりますが、ぼくの目測による推定値としては、^{おにがほら} 鬼ヶ洞を構成する巨大な岩全体の高さは12メートルぐらいで、洞窟の入口の高さは7～8メートルぐらい、洞窟の入口の横幅は2メートルぐらい、洞窟の奥行きは9～10メートルぐらいではないかと感じました。^{おにがほら} 鬼ヶ洞の洞窟の入り口が向いている方向をコンパスで確認したところ、おおよそ、南南西を向いているようでした。

鬼ヶ洞から「比叡山」を見つめる視線

比叡山地の主峰は大比叡峰です。ですが、比叡山地の西側（や南西側）にあたる、八瀬地域をふくむ京都市側からは、大比叡峰は見えません。そのかわりに、八瀬側からは、大比叡峰のすぐちかくにある四明岳が、まるで比叡山の主峰であるかのようにそびえ立って見えます。つまり、ある意味で、八瀬の人びとにとっては、四明岳は「比叡山」の象徴なのではないかとおもいます。鬼ヶ洞のちかくからも、その四明岳の頂上が見えます。

梅原猛さんは、実際に鬼ヶ洞を訪れたときの経験を、次のように述べておられます。（梅原，2001, pp. 13-14）

その日は夏の真っ盛り、カンカン照りの雲ひとつない日であった。私は、八瀬童子会・現会長の保司博氏、森田一郎氏、辻利温氏を先達に、草ぼうぼうで石がごろごろしている道を登った。老齢でしかも病後の私には、しんどい登山であったが、休み休みたっぶり時間をかけて登った。

一時間も経ったであろうか。道は横ばいの尾根道になった。そこを少し進むと、にわかには鬼ヶ洞が現われた。それは私の予期に反して釜状の洞窟ではなく、切り立った岩石の間に奥の深い穴をもつ洞窟であった。今は岩が崩れて埋もれてしまったが、昔はその奥になお広い空間があったのであろう。

山を追われた縄文人の首領が、この山城を思わせる洞窟を一時の隠れ家としたのも、十分頷けるのである。そしてその目の前には比叡山がそそり立っている。山を追われ、叡山と朝廷に反抗した誇り高い八瀬の人たちの祖先は、隠れ家であるとともに山城でもあるこの鬼ヶ洞で、どのような想いで叡山を眺めていたのであろうか。

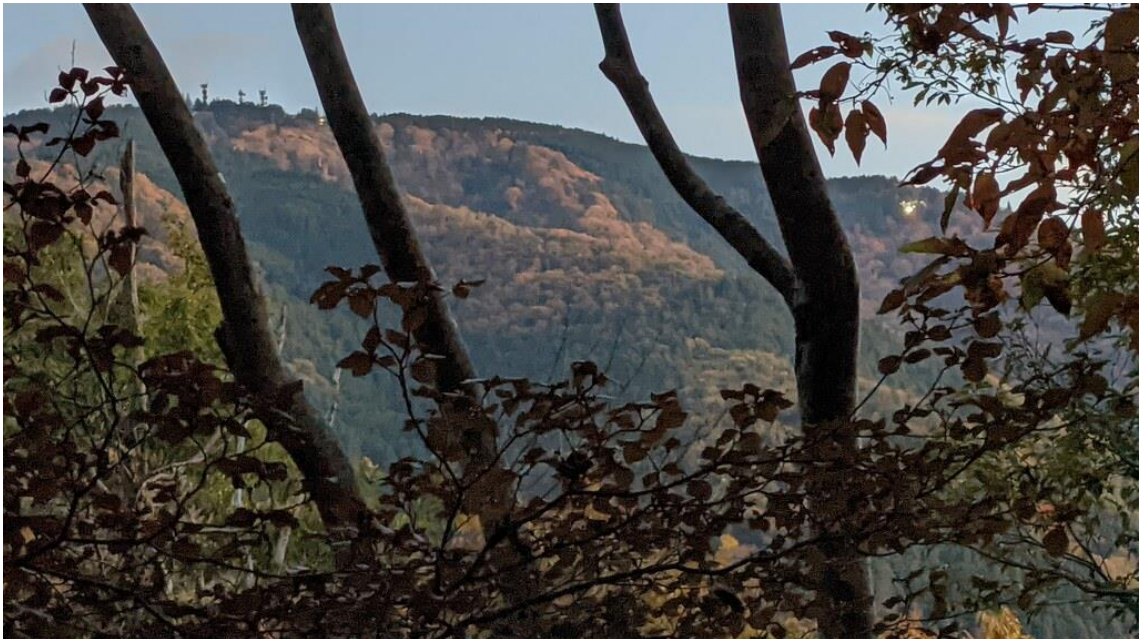
上記の文章のなかで、梅原さんがおっしゃっているように、八瀬の人たち（八瀬童子）の祖先の鬼も、おなじように、鬼ヶ洞のあたりから比叡山（四明岳）を眺めていたのかもしれませんが。

下記の写真は、鬼ヶ洞から南東へ約 150 メートルほど行ったところにある尾根から見た四明岳の山頂を撮影した写真です。



おにがほら
鬼ヶ洞のちかくから見える四明岳の頂上

下記の写真は、上記の写真とおなじ場所から、四明岳の頂上を拡大撮影した写真です。下記の写真の左上のところに小さく写っているのが、四明岳の山頂にある比叡山無線中継所の鉄塔です。



しめいがたけ
四明岳の頂上と、そこに立っている
比叡山無線中継所の鉄塔(拡大撮影)

また、下記の写真は、鬼ヶ洞^{おにがほら}の入口の前から東側に見える横高山^{よこたかやま}を撮影した写真です。横高山^{よこたかやま}は、別名として、「小比叡^{おびえ}」や「波母山^{はぼやま}」とも呼ばれる山です(武, 2008, p. 327)。「小比叡^{おびえ}」という名称は、比叡山地^{ひえいさんち}の主峰である「大比叡^{おおびえ}」に対して付けられた名称です。「小比叡^{おびえ}」という名称のなかに、「比叡^{ひえ}」(比叡山^{ひえいざん})という言葉が使われていることからわかるとおり、この小比叡峰^{おびえみね}も、大比叡峰^{おおびえみね}と四明岳^{しめいがけ}に次いで、比叡山地^{ひえいさんち}を代表する山のひとつです。



鬼ヶ洞^{おにがほら}の東側には横高山^{よこたかやま}
(小比叡峰^{おびえみね}、波母山^{はぼやま})が見えます



おにがほら
鬼ヶ洞の前から見える横高山
おびえみねはほやま
(小比叡峰、波母山)の山頂部分(拡大写真)

上記の写真のように、八瀬童子の祖先の鬼も、おなじように、鬼ヶ洞から「比叡山」を眺めていたのかもしれません。

鬼ヶ洞の念仏供養

ちなみに、かつて、八瀬の人びとが先祖の鬼をとむらうために鬼ヶ洞でおこなっていた念仏供養の年中行事は、大正時代に廃絶してしまい、現在はおこなわれていないそうです。下記は、それについての記述です。

「鬼が洞」で八瀬の人たちは毎年七月十五日に念仏供養をし、祖先の霊を慰めたという。しかしその念仏供養も今は絶えて、「鬼が洞」を訪ねる人もいないという。(梅原, 2001, p. 13)

この念佛供養の行事は、大正期になって、なくなったといわれている。(池田, 1963, pp. 16-17)

『林羅山詩集』(『羅山文集』)

ここからは、八瀬の鬼ヶ洞についての記述がある古文献などを紹介させていただきたいとおもいます。

本稿で紹介するいくつかの古文献のなかでは、八瀬の鬼ヶ洞についての記述の引用元として、しばしば、江戸時代前期に林羅山が書いた『羅山文集』という文献が紹介されています。その文献に記載されていたという、八瀬の鬼ヶ洞についての記述は、1979年に出版された『林羅山詩集 上巻』のなかに記載されている、下記の記述のことだろうとおもいます(その理由は、後述します)。具体的には、『林羅山詩集 上巻』の巻第35の「酒顛童子洞に題す」という題名がついている文章のなかに、八瀬の鬼ヶ洞(鬼が洞、酒顛童子洞)についての記述があります。その記述は、下記のようなものです(『林羅山詩集 上巻』, pp. 385-387)。(下記の文章は、すこし長い文章ですが、酒顛童子(酒吞童子)についての興味深い話がふくまれているので、鬼ヶ洞についての話以降の部分も紹介させていただきます。)

酒顛童子洞に題す 序を并す

洞〔洞穴〕は、八瀬河西山中に在り。俗に号して、鬼が洞〔鬼ヶ洞〕と曰う。洞口狭く、中闊なり〔なかは広い〕。高さ二丈強、深さ三丈有奇〔高さは約6メートル、深さは約9メートル〕。世に称して、「酒顛童子〔酒吞童子〕、この洞より丹波大江山に移る」と云う。余の性〔私〔林羅山〕の性格は〕、奇を搜り、幽を探るを嗜む〔好きである〕。名山、佳水、古跡、靈区に遇うごとに、これを歆羨せずということ無し〔とても心を惹かれる〕。今、この洞〔鬼ヶ洞〕を見んと欲す。一日山に登り、一氓〔一人の地元民〕をして、まず、これを導かしむ〔案内させた〕。数健丁〔健児〕、兒子を負う〔数人の召使いが、子どもを背負う〕。暨

び、同来者の数輩〔たくさんの人たち〕、俱共にす。行くこと一千余歩許り、洞〔鬼ヶ洞〕に達す。その路、嶮にして〔険しくて〕、細し。葛藟、足を縈り、荊棘、手を姦す〔葛や藟のつる草が足にまとわりつき、いばらの棘が手に刺さる〕。匍匐蚊行し、沙石転動す〔腹ばいになって進むたびに、砂や石がくずれ落ちる〕。或は〔ある人は〕、前なる者の脚、後なる者の帯を踏む。或は〔ある人は〕、岩に傍いて、側を行けば、すなわち、不側の谷に臨む〔目指していた場所と異なる谷にたどり着いてしまった〕。或は〔ある人は〕、嶮を憚りて、陟ることあたわざる者あり〔険しい道を行くことに差し障りがある、登ることができない人もいた〕。余〔私〔林羅山〕〕も、また、中途、倦み怠ることありて〔途中でつかれてしまつて〕、少焉息いて、また躋る〔すこし休んでから、また登った〕。ここに於いて、余〔私〔林羅山〕〕後れたり。華山の啼哭ありて、象山の健歩無きが如し。従者、扶けて、行く。既にして、洞〔鬼ヶ洞〕を臨む。相距たること、殆ど二百余歩。ここに至りて、愈々峻隘〔ますます、けわしくなる〕。兒子、数輩と早く洞〔鬼ヶ洞〕を出でて帰るに会う。兒子、余

〔私(林羅山)〕を迎え見て曰く、「我、已にこれを見る。異事無し〔大したことはなかった〕。請う、ここより還らん」。余〔私(林羅山)〕、乃ち下る。遂に、一人の誤り、跌く者無し。殆ど天なり。所謂、追して怪せず。岩墻の下に立たざる者をして、余〔私(林羅山)〕、自ら悔い、自ら警む。兒子、唯諾して曰く、「あえて忘れじ」。且つ、このことを記せんと請う。

〔子どもが〕余〔私(林羅山)〕に告げて曰く、「諸れ、或る人に聞けり。流俗猥雑の図書を讀むに、云えることあり。『昔、叡山〔比叡山〕に一童あり。僧徒その美を愛し、酒を勸め、歡を交ゆ。時時、人を齧み、血を舐り、酒に和して、これを飲む。一旦〔ある朝〕、魅〔妖怪〕と為り、この洞〔八瀬の鬼ヶ洞〕に入る。遂に、行きて大江山に栖む。天陰り、月昏く、風迅く、雨甚だしきに至る毎に、すなわち出でて、人民婦女を攫む。尋ねれども、その之く所を見ず。また、金熊、石熊の二童あり。これが徒属為る者、数十鬼、住往に〔しばしば〕物を害す。人、皆患うの事、以聞す〔多くの人々が悩み苦しんでいることを、天皇に申し上げる〕。源の頼光、勅を奉け、綱〔渡辺綱〕、保昌〔藤原保昌〕等、七人を率い、陽りて、峰に入る行者〔俗に山伏と号す〕の為し、山に入り、溪を渉る。婦の血汚る衣を洗うを見る。婦、曰く、「これ人の到る所に非ざるなり。過に去るべし」。頼光これを問う。その郷居、姓字、信あり。相共に語る。遂に、婦と約して、鬼窟に到る。鬼〔酒吞童子〕、童形を現し、出でて頼光等に見ゆ。誘きて、毒酒を強い使む。童〔酒吞童子〕、酔いて、窟裏に臥す。諸鬼、尽く酔う。婦、導きて、石扉を開きて、直に入る。一太鬼の、石床に寝るを見る。貌、甚だ畏るべしなり。頼光、剣を抜き、大呼して曰く、「普天率土、悉く皆王民。何ぞ鬼魅の居る所ならんや。吒〔大声で〕しかりつける。爾じ鬼、この剣は、これ八幡大神の靈剣なり」。鬼〔酒吞童子〕、駭き起きて、將に頼光を搏たんとす。頼光、徑ちに前みて、鬼を刺す。鬼、猶お、その頂を掴む。綱〔渡辺綱〕、復た進みて、鬼を斬る。并せて、金熊、石熊の諸属を戮し、鬼首を一車に載す。頼光、還りて、奏す〔天皇に報告申し上げた〕。天子、大いに喜び、勅して、鬼首を右函に納め、山中に埋む』。諸れ有りや〔このようなことがあるのでしょうか?〕」。

余〔私(林羅山)〕曰く、「然り。民俗の伝うところ、独り我邦已にあらず。武王、商〔殷王朝〕に克つ時〔勝利したとき〕、姫已〔姫己〕、化して、九尾狐となり、飛んで天に上らんと欲す。太公〔太公望呂尚〕、符を以て呪すれば、すなわち、狐の墜るが若きは、すなわち、史伝の載するところにあらずして、婦人兒女子の野語なり。何として、丈夫の齒牙に上すに足らんや〔一人前の男子が話題にするようなことではない〕。或は〔ある人は〕、万物變化、測りがたき者、或は〔ある人は〕、深山大沢、自ら厲鬼ある者、これあるが若し。また或は〔ある人は〕、事を妖術に借り、以て劫盜を為する者の、またこれあり。他日、読書格物、宜く自ら知るべし」。

ここに於いて、[子どもが]また問いて曰く、「羅城門、生田の森、鈴鹿山、足立が原、戸隠山、皆云う、『昔、鬼あり』と。これまた然るか〔これもまた同様のことでしょうか？〕。類に触れて、これを長ずるか」。

余〔私(林羅山)〕曰く、「然り。ここに説あり。酒顛童子〔酒呑童子〕より大なる者あり。酒顛〔酒呑童子〕は害を為したること小にして、桀紂〔古代中国の夏王朝の桀王と、殷王朝の紂王。暴君の代名詞〕は大なり」。

〔子どもが〕曰く、「何ぞや」〔なぜですか？〕。

〔林羅山が答えて言う、〕「昔、紂〔紂王〕、渉を斫き、心を割き、胎を刳り、炮烙し、玉杯に呑啖し、瓊宮に盤栖し、酒池に沈湎し、脯林に餐饕し、穢腥、天に聞う。所謂、主萃淵藪。豈に、翹、一鬼小洞の比い已みならんや。下流に居れば、天下の悪、皆帰す。豈に、翹、大江山、涓涓の細流の類いならんや〔大江山の酒呑童子の悪事などは、大したことはない。〕」

列に在る者、聞きてこれを笑う。兒子、またこれを笑う。曰く、「頼光、此れ一時なり。武王、彼れ一時なり。小を以て大に喩うといえども、害を除くは一なり〔頼光此一時 武王彼一時 雖以小喩大 而除害一也〕。遂に、一絶句を作る〔五言絶句がひとつできた〕と云う。

酒池顛飲肉林の中、殷紂〔殷王朝の紂王〕、元来これ狡童。鬼と為り、人と為りて、俱に害を作す。窟宅と瓊宮とを論ぜず。

(以下は、『羅山文集』についての補足説明です。) 上記の記述がある、『林羅山詩集 上巻』の本は、1979年に、『林羅山文集』上下巻と、『林羅山詩集』上下巻の、合計4冊として出版されたもののうちの1冊です。これらの文集と詩集は、もともと、江戸時代前期の1662年(寛文2年)に、林羅山の文集75巻と、詩集75巻、目録、附録などをあわせて、合計60冊として出版されたものです(『林羅山文集 上巻』、巻頭の「林羅山文集例言」)。その1662年(江戸時代前期)に出版された文献が、いくつかの古文文献のなかで、八瀬の鬼ヶ洞についての記述の引用元として紹介されている、『羅山文集』なのだろうとおもいます。ですが、それらの古文文献では、『羅山文集』が引用元であるとされているものの、1979年出版の『林羅山文集』上下巻のなかには、八瀬の鬼ヶ洞についての記述は無いようでした。(念のために、1979年出版の『林羅山文集』上下巻のすべてのページに、ざっと目を通して見たのですが、八瀬の鬼ヶ洞についての記述は無いようでした。) ですので、おそらくは、古文文献のなかで、八瀬の鬼ヶ洞についての記述の引用元として紹介されて

いる、『羅山文集』^{らざんぶんしゅう}というのは、厳密に言えば、「(1662 年(江戸時代前期)に出版された)『羅山文集』^{らざんぶんしゅう}(文集と詩集の両方を含む)のなかの、詩集(『林羅山詩集』^{はやしらざんししゅう})の部分(のなかの巻第 35)」のことを指しているのだろうとおもいます。(とは言え、ぼくが見落としている部分もあるかとおもいます。ですので、もし、1979 年出版の『林羅山文集』^{らざんぶんしゅう}上下巻のなかに、八瀬の鬼ヶ洞^{やせおにがほら}についての記述がある部分をご存知の方がいらっしゃいましたら、教えていただければ幸いです。)

『本朝通鑑』

『本朝通鑑』^{ほんちょうつうかん}は、江戸時代前期の 1670 年(寛文 10 年)^{かんぶん}に成立した歴史書です。編者の林鷺峰^{はやしがぼう}は、林羅山^{はやしらざん}の息子であり、儒学者です。父の林羅山^{はやしらざん}は、3 代将軍徳川家光^{とくがわいえみつ}の命令により、『本朝編年録』^{ほんちょうへんねんろく}という歴史書をつくりました。ですが、その歴史書は、明暦の大火で焼失してしまい、林羅山^{らざん}自身もその数日後に亡くなってしまいます。その後、4 代将軍徳川家綱^{とくがわいえつな}の命令により、息子の林鷺峰^{はやしがぼう}が、『本朝編年録』^{ほんちょうへんねんろく}に新たな内容を追加することで完成した増補改訂版が、『本朝通鑑』^{ほんちょうつうかん}です。(『朝日日本歴史人物事典』, pp. 1340-1341, pp. 1346-1347)

『本朝通鑑』^{ほんちょうつうかん}の巻第 24 の「後一条天皇 二」^{ごいちじょうてんのう に}の「治安元年」^{じあんがねん}(1021 年、平安時代中期)の条文の末尾のところに、その年に亡くなった源頼光^{みなもとよりみつ}の生前の業績を紹介する文章が記載されています。その源頼光^{みなもとよりみつ}の生前の業績のひとつとして、酒顛童子^{しゅてんどうじ}(酒呑童子^{しゅてんどうじ})を退治した話が記載されていて、その話のなかに、八瀬の鬼ヶ洞^{やせおにがほら}(洞、巖窟、鬼窟)についての記述があります。その記述は、下記のようなものです(『本朝通鑑 第六』, pp. 1575-1576; 『本朝通鑑 : 標記 巻第 29』, pp. 19 丁表-19 丁裏)。下記の文章の内容は、前述の『林羅山詩集』^{はやしらざんししゅう}の内容とほぼおなじです。ただ、酒顛童子^{しゅてんどうじ}についての話の末尾にある一文は、『林羅山詩集』^{はやしらざんししゅう}にはない内容です。

世に伝う。昔し叡山^{むかえいざん}[比叡山^{ひえいざん}]に一童あり。僧徒その美なるを愛し、酒を勧めて交歓^{すすこうかん}す。時々人を齧^かみ血を舐^{ねぶ}り、酒に和^わしてこれを飲^いむ。一旦[ある朝]魅^{すだま}[妖怪]と為^なり、酒顛童子^{しゅてんどうじ}と号す。山を出でて西の麓^{ふもと}の八瀬^{やせ}の村に到^{いた}り、洞を造^{つく}りてこれに住す。既にして丹波国^{たんぱ}大江山^{おほえやま}に入り、巖窟^{がんくつ}を営^いみて、これに居^こす。毎に天陰^{つね}り月昏^{かげ}く風迅^{くはげ}く雨甚^{はげ}だしきに至れば、則ち出でて人民の婦女を攫^{すなわ}む。尋ぬれどもその之く所を見ず。又金熊石熊^{またかねくまいしくま}の二童あり。且つこれが徒属^か為^{とぞく}る者数十鬼^{ものおう}、往々[しばしば]物^{もの}を害^{がい}す。人皆これを患^{うれ}うの事以^{こと}聞^{きこ}す。頼光^{よりみつ}に勅^{みことり}してこれを討^うたしむ。藤の保昌^{ふじやすまさ}をもつて副と為^なす。頼光^{よりみつ}、渡辺綱^{わたなべつな}等を率^{ひき}い、陽^{ひき}りて峰^{みね}に入る行者^{ぎやうじゃ}の為^{ため}して、山に入り、溪^いを渉^{わた}る。婦^{おんな}の血汚^{よりみつ}る衣^{わた}を浣^{おん}ぐを見る。婦^{おんな}、頼光^{よりみつ}等に謂^いいて曰^いく、「此れ人の到^{いた}る所に非^{あら}ざるなり。遄^{すみやか}に去^さるべし」と。頼光^{よりみつ}これを問^とうに、その郷居^{さと}、姓^{かばね}、字^な、信^{しん}あり。相共^{あひとも}に語^{かた}り、遂^{つい}に婦^{おんな}と約^{やく}して、鬼^{おに}が窟^{いわ}に到^{いた}る。鬼^{おに}[酒呑童子^{しゅてんどうじ}]、童形^{どうぎやう}を現^{あらわ}し出^いでて頼光^{よりみつ}等に見^{まみ}ゆ。誘^{おび}きて毒酒^{どくしゅ}を強^きい使^{もち}む。童^{どうじ}[酒呑童子^{しゅてんどうじ}]、酔^よいて窟裏^{くつり}に臥^ふす。諸鬼^{もろおに}、尽^{ことごと}く酔^よう。婦^{おんな}、導^{みちび}きて石扉^{いしど}を開^{ひら}きて、直^{ただち}に入る。一^{ひとつ}大鬼^{おほおに}の石床^{いわたこ}に寝^{いぬ}るを見る。貌^{かたち}甚^{はなは}だ畏^{おそ}るべしなり。頼光^{よりみつ}剣^{けん}を抜^ひきて大呼^{よりみつつるぎ}して曰^いく、

「普天率土、悉く皆王民。何ぞ鬼魅の居る所ならんや。叱〔大声でしかりつける〕。爾じ
鬼、此の劍は是れ八幡大神の靈劍なり」と。鬼、駭き起きて、將に頼光を搏たんとす。
頼光、怪ちに前みて、鬼を刺す。鬼、猶お、その頂を掴む。綱、復た進みて鬼を斬る。
并に金熊石熊の諸属を戮し、鬼首を一車に載せ、洛に還る。勅して鬼首を石函に納
め、山中に埋む。

(大江山、八瀬、共に鬼窟の跡あり。或いは曰う、酒巖鬼、近江国伊吹山窟に居す。
頼光往きてこれを誅すと云う。)

『雍州府志』

『雍州府志』は、江戸時代前期の1686年(貞享3年)に出版された、山城国についての地誌で
す。著者の黒川道祐は、医者、儒学者です。彼は、林羅山やその息子である林鷺峰から儒学を
学んでいます(『日本随筆大成 第1期 10』, pp. 1-2(解題))。そのため、下記の八瀬の鬼ヶ洞に
ついての記述のなかには、林羅山・林鷺峰の著書からの影響が見られます。

『雍州府志』の巻1の「山川門」の「愛宕郡」のところに、「八瀬の里」と、「鬼が洞」(鬼ヶ洞)につ
いての項目があります。それらの項目の記述は、下記のようなものです(立川, 1997, pp. 34-35)。

八瀬の里

洛を去ること、東北三里ばかり、叡山〔比叡山〕の麓にあり。この辺、すべて小野の庄
内なり。一説に、天武天皇、大友の皇子に襲われ給う時、この里に逃れ給う。流矢、天
皇の背後に中る。故に、矢背と号すという。土俗、男子、また椎髻。伝えい、山鬼、か
つて八瀬河の西山中、鬼が洞〔鬼ヶ洞〕に栖む。一村の男女、ことごとく山鬼の裔〔末裔〕
なりと。故に、男子もまた、髪を頭上一処に束ぬ。今に到りて、毎年七月七日より同月十
五日に至るまで、村中の児女、この洞に聚まりて、鉦を鳴らし、大いに弥陀仏〔阿弥陀
仏〕の号を唱う。これを、先祖を祭るといふ。予〔私(黒川道祐)〕思うに、この処、叡山〔比
叡山〕の麓にあり。伝教大師より以後、牛車を聴さるるの僧、この土人をして車〔牛車〕
を蔵し、牛を飼わしむ。その僧、車〔牛車〕に乗り、洛に入るの日、すなはち土人をして牛
童たらしむ。倭俗、牛童、長髪を頂の上に束ね、その末を背後に垂る。今の長髪は、
すなわちその遺風なり。何ぞ鬼神の裔〔末裔〕たることあらんや。一村百戸余。俗朴、身
に木綿衣を着け、また裘・革袴を着る。山に登ること、猿狖の如し。田を耕すに牛馬
をもつてす。農暇、各々斧鎌を腰にし、山に登りて木を伐り、尺ばかりにこれを束ね、窖
に入れてこれを蒸し、湿気を去るときは、青色たちまち黒に変ず。これを黒木といふ。
日々、京師に売る。大原の土俗もまた然り。

おに ほら おにが ほら
鬼が洞〔鬼ヶ洞〕

八瀬河の西山中にあり。洞口狭く、中闊し。高さこと二丈強、深きこと三丈有奇〔高さは約6メートル、深さは約9メートル〕。古え、鬼神、この洞に棲む。故に、俗に号して、鬼が洞〔鬼ヶ洞〕という。酒顛童子もまた、この洞より丹波大江山に移るという。

「北肉魚山行記」(『近畿歴覧記』)

「北肉魚山行記」は、江戸時代前期の1682年(天和2年)ごろに、黒川道祐が書いた、大原や八瀬などの洛北地域(京都市北部地域)についての記録です。この「北肉魚山行記」は、『近畿歴覧記』という文献に収録されている章のひとつです。『近畿歴覧記』は、黒川道祐が、山城国の地誌である『雍州府志』を編集するにあたっての前準備として、近畿地方の名所旧跡をめぐって、それらの情報を記録したものです。

「北肉魚山行記」のなかの「矢瀬の里」(八瀬の里)についてのところに、「鬼力洞」(鬼ヶ洞)についての記述があります。その記述は、下記のようなものです。(引用文中の「■」は、欠損部分です。)(『京都叢書 第3増補』, pp. 126-127)

〔前略〕高野川を渡り、八瀬の道に出でて、行くこと一里許にして、矢瀬〔八瀬〕の里に入る。天武帝、昔日、大友の皇子に襲われ給うとき、この道より近江に御出あり。このところにおいて、追い奉る武士、矢を放ち供奉の人に中りし故に、それより八瀬を矢背とも書けりとなん。この道より若狭・小浜へ二十八里あり。また、朽木・大溝へ出ず。また、葛川よりは、大木へ越となん。龍華越へも、これより出ず。八瀬は土民専ら黒木を商う。これをふすぶる竈の下に塩薦を敷き、これに入るときは湿気を払えとて、京都より男女保養に來り入る。この所のもの、各々髪を長くし丸く結い、かりそめに見ときは、男女の差別、見分け難し。天武帝、暫くこのところに御座せり。民人ども、官家の体を學し余風なりという。一説に、この一村は鬼の子孫なり。古は髪をも結わず、首に被てありしを、中世よりこれを結う。故に、今、毎年七月七日より十五日まで、この奥、鬼ヶ洞とて、鬼の住し所あり。それは村中児女、毎日行き、鉦をならし念仏を修す。これ、先祖鬼の弔と言う。されども、この義にあらず。伝教繁昌の時、牛車聴さる。この時、この村に駕車牛を飼しめ、舎人を置く。この車副舎人の末裔故に首あり体■。

『都名所図会』

『都名所図会』は、江戸時代中期の1780年(安永9年)に発行された、挿絵入りの京都の名所案内書です。編者は秋里籬島で、挿絵を描いたのは竹原春朝斎です。

『都名所図会』の巻3(左青龍)の「矢背の里」(八瀬の里)のところに、鬼ヶ洞(鬼が洞、酒顛童子の洞)についての記述があります。その記述は、下記のようなものです(『京都叢書 第11増補』, pp. 171-175; 岩松, 2003, p. 117)。

八瀬の里人はいにしへの風俗ありて、男も女のごとく髪をぐるぐると鬘、女も男の様に脛高くからげ、脚半は向うのかたにて合せ、草鞋の爪先の紐異なるは、故ある事にや。

氏神天満宮[八瀬天満宮]の鳥井のまゑに弁慶の背競石とて高さ八尺ばかり[約 2.4メートル]の石有。[弁慶がその石を]叡山西塔[比叡山延暦寺の西塔地区]より、ここに提来[ひっさげて来た]といい伝え侍る。
鬼が洞というは此里の西の方に有。昔叡山の悪児鬼同丸[鬼童丸]という者住しとなり。『羅山文集』[林羅山の文集]には「酒顛童子の洞と称じける」となん書り。

『京師巡覧集』

『京師巡覧集』は、江戸時代前期の1679年(延宝7年)に刊行された詩集です。著者である、丈愚という名前の僧侶が、京(京都)を見物したときに書き記したものです。京の周辺の名所旧跡の、それぞれの由来や、その場所について詠んだ詩が記載されています。

『京師巡覧集』の巻之15に、八瀬の鬼ヶ城(鬼ヶ洞)についての記述があります。その記述は、下記のようなものです(『京都叢書 第4増補』, p. 300)。

鬼ヶ城
烈々たる岩屋の中に聳たる石あり。これを鬼が石と名づく。この構えを鬼ヶ城[鬼ヶ城]と名づく。

圀園娑婆にあり。草芒楚を作りて振う。岩は衆合の勢を余す。風は烈し焰羅の瞋り。
崔氏金椀を送る。藻妻白銀を得たり。能く地下に通すべし。沸た出て、亡親を憶う。

『山城名勝志』

『山城名勝志』は、江戸時代前期の1705年(宝永2年)に発行された、山城国(現在の京都府南部の地域)の名所旧跡についての文献です。編者は源武好です。

『山城名勝志』の巻第15(愛宕郡5)の末尾にある「附録」のなかに、八瀬の鬼ヶ洞(鬼洞、酒顛童子洞)についての記述があります。その記述は、下記のようなものです(『新修京都叢書 第14巻 2版』, p. 283; 『史籍集覧 22改定』, p. 837)。

また、下記の文章には、「八瀬童子が地獄の鬼の子孫である」というような意味の記述があるという、『蹇驢嘶余』という文献からの引用文も含まれています。（『蹇驢嘶余』の成立年代は、「早くは室町時代と思われる」とされています（池田, 1963, p. 15）。）

おにがほら や せ むら さんぶく
鬼 洞 八瀬村西山腹にあり

『羅山文集』〔林羅山の文集〕に云う。洞〔鬼ヶ洞〕は八瀬河〔八瀬川〕の西の山中にあり。俗に号して鬼 洞〔鬼ヶ洞〕と曰う、口狭く中闊く、高さ二丈強、深さ三丈有奇〔高さは約 6 メートル、深さは約 9 メートル〕、世に酒呑童子洞と称す、云云。

『蹇驢嘶余』に云う。（門跡御輿昇事）八瀬童子なり、閻魔王宮より返る〔帰る〕の時、輿昇たる鬼の子孫なり。

鬼 洞〔鬼ヶ洞〕はこの縁によって名付けたる歟。毎年七月十五日、この村民等この洞の前に来て念仏すと云云。また酒呑童子と云うこと、謂れ無し。

『著聞集』〔古今著聞集〕に、鬼同丸〔鬼童丸〕と云う者あり、源 頼光朝臣、鞍馬詣で
の時、市原野においてこれを誅す、云云。ある書に云う、市原野の乾に当って一つの
岩窟あり。鬼同丸〔鬼童丸〕と云う狡童住めり。その先、比叡山の児なり。山を追いださ
れ、かの窟を構えて、隠れ住みけると云えり。

『出来斎京土産』

『出来斎京土産』は、江戸時代前期の 1677 年（延宝 5 年）に発行された文献です。京（京都）の
周辺の名所旧跡の、それぞれについての情報と、その場所について詠んだ狂歌が記載されてい
ます。著者は不詳です。

『出来斎京土産』の巻之 5 のところに、八瀬の鬼 城（鬼ヶ洞）についての記述があります。その
記述は、下記のようなものです（『京都叢書 第 4 増補』, pp. 94-95）。

おにがじょう
鬼 城

八瀬の里より西北の方に鬼が城とて、もの恐ろしき岩窟あり。その内に鬼石とて、角菱
荒けなき石あり。むかし、酒典童子〔酒呑童子〕ひえの山〔比叡山〕より追出だされて、こ
の岩窟に隠り、この石の上に起き伏しけりと言う。後に丹波国大江山にして、源 の頼光
に殺されしとかや。藤原 千方は、四の鬼を召し使い、坂 上田村丸は、勢州〔伊勢国〕鈴

鹿山の鬼を殺し、渡辺源五綱は、東寺の羅生門の鬼を討ち、和州〔大和国〕宇多の森の鬼を斬り、余五將軍平維茂は、信州〔信濃国〕戸隠山の鬼を打たりと言えり。そのほか、異国、本朝に、鬼のことども、その例少なからず。今は時世治まりて、仏法繁昌する故にや、いづくに鬼ありとも聞こえず。されども、天狗、火車の所為は今もありと言う。むかし、大和の元興寺の宝蔵に盗人の隠れ住みけるを、「鬼あり」と言い流行らかし、子どもを脅して元興寺〔がごじ、元興寺の鬼、妖怪〕と言えは泣きさしけりと言う。中頃、盗人の大将と聞こえし石川五右衛門とかや言う者、大和・河内の境、立田の峠に隠れ、面に粧鬼臉をあて、鬼の出立して人を追い倒し、はぎ取りしと聞き伝う。盗人の科無き人を殺し、物を奪うは鬼ならずや。六条の御息所、金輪の女房は、生きながら鬼になりたり。もの妬み猛く、執心深く、吝姫強く怨み瞋る女は、角は生えずとも鬼ならずや。兼盛〔平兼盛〕が安達ヶ原の歌は、女を鬼と詠めり。

その跡の名を聞だにもおそろしや
只一口の鬼が城とは

『菟藝泥赴』

『菟藝泥赴』は、江戸時代前期の1684年（貞享元年）に書かれた、山城国（現在の京都府南部の地域）の周辺の名所旧跡についての文献です。著者は、俳人、歌人、古典学者である北村季吟です。現存するものは写本であり、原本は現存していないようです（『京都叢書 第5増補』, p. 2（解題））。

『菟藝泥赴』の第5の「矢瀨」のところに、鬼洞（鬼ヶ洞）についての記述があります。その記述は、下記のようなものです（『京都叢書 第5増補』, pp. 278-279）。

矢瀨

天野の奥、八瀨の河、天智帝、隠れさせ給いて後、御子大友の皇子の東宮、天武帝を襲い奉らむとす。天武帝、吉野を出でさせ給いて、山城の国を過ぎ給うに、流矢来たりて、天武の背に中れり。其所を矢瀨と云うよし、日本紀〔日本書紀〕にあり。

六帖〔古今和歌六帖〕

春雨のふりはへ行て人よりはわれ先つまむ八瀨河のせり

拾玉集〔拾玉集〕

冬の来てはむに物なき牛の子のやせゆくさとの頃の淋しさ

一、矢瀬〔八瀬〕に鬼洞〔鬼ヶ洞〕とて、洞口三間ばかり〔約 6 メートル〕。奥の深さ知る人無し。いにしえ、この洞に鬼住めり。日枝〔比叡山延暦寺〕の西方院の何がし阿闍梨につかえたり。八瀬の里人はその鬼の子孫とて、日枝〔比叡山延暦寺〕の法会に詣でて、飯を鬼喰いとて食うことあり。頭、唐輪に結げて〔頭髪を唐輪の髪形の髻にして〕、鬼童と言えり。

『京都府愛宕郡村志』

『京都府愛宕郡村志』は、1911 年(明治44 年)に、京都府愛宕郡役所によって編集された地誌です。かつて、愛宕郡に属していた村々についての情報が記載されています。

『京都府愛宕郡村志』の「八瀬村」のところに、鬼ヶ洞についての記述があります。その記述は、下記のようなものです(『京都府愛宕郡村志』, p. 346)。

鬼ヶ洞
本村西山字岩山の半腹〔中腹〕に在り。登路〔登り道〕、五町余〔約 545 メートル〕。陰なり。洞は南に向い、高さ二丈、深さ三丈余〔高さ約 6 メートル、深さ約 9 メートル〕。入口、広さ八尺〔約 2.4 メートル〕。口〔入り口〕隘く、内広し。殆ど四帖敷許なり〔畳約四畳ほどの広さがある〕。天然の岩窟なり。口碑に、「八瀬童子の旧跡なり」と云う。今に至り、毎年七月十五日、洞の前にて念仏供養をなすとぞ。

『八瀬記』

『八瀬記』は、江戸時代中期の 1716 年(正徳6 年)に成立した、八瀬村についての史料集です。『八瀬記』に収録されている史料は、南北朝時代の 1336 年(建武3 年)～江戸時代前期の 1710 年(宝永7 年)までの史料です。(『八瀬童子会文書』, p. 11)

『八瀬記』のなかに記されている、鬼ヶ洞についての記述は、下記のようなものです(『八瀬童子会文書』, pp. 72-73)。下記の記述のなかには、「八瀬童子の祖先である鬼を酒顛童子(酒呑童子)だとする言説があるが、それは間違いである」というような意味の記述があります。

鬼洞〔鬼ヶ洞〕 八瀬村の西の山腹に在り

『羅山文集』に云う。洞、八瀬川の西の山中に在り。俗に号して、鬼洞〔鬼ヶ洞〕と曰う。口狭く、中広し。高さ二丈強〔約 6 メートル〕、深さ三丈〔約 9 メートル〕有し、奇世に、酒顛童子洞と称す、云々。

『蹇驢嘶余』に云う、(門跡御輿昇事) 八瀬童子なり。
閻魔王宮より返る[帰る]時、輿昇たる鬼の子孫なり。

鬼洞[鬼ヶ洞]の事、この如く相見え候えども、当村、申し伝え候うは、先祖鬼の子孫ゆえ、今に至り、毎年七月十五日、鬼洞[鬼ヶ洞]の前にて念仏供養申し候う段、代々申し伝え候う。酒顛童子と申すこと、大いなる誤りに候う。後代のため、書きしるし置くものなり。

ちなみに、『八瀬記』に記されている鬼ヶ洞についての記述のなかには、元の文章から写し間違ったとおもわれる箇所があります。このことについては、『八瀬記』を収載している『八瀬童子会文書』の冒頭の「解説」のところに、つぎのような注意書きがあります。「『八瀬記』の記載内容について注意すべきは、原文の写しまちがい等が散見されることにあるが、翻刻にあたっては原本どおりとした」(『八瀬童子会文書』, p. 11)。

鬼ヶ洞の地図が収載されている文献

鬼ヶ洞の場所の地図が収載されている文献はあまりないようです。ですが、下記の文献には、鬼ヶ洞の場所の地図が収載されていました。

- 谷北兼三郎(1925)『八瀬大原の栞』の、巻末の折り込み地図。
- 梅原猛(2001)『京都発見 3(洛北の夢)』の、巻頭の地図。
- 京都新聞社[編](1980)『京の北山：史跡探訪』の、43ページの地図。

ただ、これらの文献に収載されている地図で示されている鬼ヶ洞の場所は、どれもおおまかな場所を示すにとどまっています。ですので、鬼ヶ洞の正確な場所や、そこへ至る経路などは、これらの文献の地図からはわかりません。ちなみに、『八瀬大原の栞』の巻末の地図は、八瀬の御所谷や聖社などの名所旧跡以外にも、大原地域の名所旧跡も記載されているので、興味深いです。

ちなみに、江戸時代に比叡山延暦寺側の人たちがつくったとおもわれる、『山門三塔坂本惣絵図』と、『山門結界裁許絵図』の古地図には、八瀬の里が描かれています。ですが、なぜか鬼ヶ洞については、どちらの古地図にも描かれていませんでした。(『八瀬童子：天皇と里人：重要文化財指定記念』, p. 57, p. 71, p. 83; 武, 2008, 口絵(『山門三塔坂本惣絵図』))

鬼ヶ洞のマンガン鉱

ちなみに、鬼伝説と鉱山とのあいだに深いかわりがあることは、よく言われることですが、八瀬の鬼ヶ洞^{おにがほら}やその周辺にも、鉱山としての性格があった、というような話があるようです。若尾五雄さんの『鬼伝説の研究：金工史の視点から』^{おにがほら}には、鬼ヶ洞の周辺でマンガン鉱が採掘されていたという、次のような話が記されています（若尾, 1981, pp. 200-201）。

〔前略〕高野川の右岸にある山には、いわゆる鬼ヶ洞という岩屋があり、その中に鬼石という石があり、比叡山を追われた酒吞童子のいたとされるもので、その昔は八瀬の人々が七月十五日まで一週間念仏供養をここで行ったと言われている所である。

この八瀬を訪ねて、秋元の玉川という老人に話を聞いた。鬼ヶ洞は今はずれて近寄りがたいが、硫黄という地名で、この鬼ヶ洞の裏手は、マンガン鉄が出て、戦時中に掘ったことがある。さらに、この山の下方には銅を含んだ山もあると話してくれた。だが、

京都市北方の鉱脈は高野川の西方で東の地区には全くなく昔からも採掘、採鉱等跡ありません。又南は大原の南まで八瀬まで続いておりません。北東は滋賀へ、西は京北町へ延びて居ます。上記の通りです。参考になりますか、御推察の如く大古からの名刹の境内等には或はとも考えられますが、古から探鉱など簡単に出来ない場所故想像も出来ない状態です。

京都市左京区高野泉町 吉田吉太郎

と、鉱山師からは返信を帰岸してから得ている。この通信の高野川西方とあるのは高野川の右岸鬼の洞がある方で、東方は比叡山側である。だから鬼ヶ洞の山にマンガン鉄が出て当然だが、この文では大原という八瀬の北隣の地城から南にあたる八瀬には鉱脈がないとあるが、前記の玉川氏は七〇を越した古老であって、マンガン鉄を掘った戦時中のことは生きた目で見ていたことは確実だから、大原から南方に鉱脈がないというのは誤りである。

上記の話については、はっきりとしたことはわかりませんが、興味深い話だとおもいます。

鬼腰掛岩(おにのこしかけいわ)



おにのこしかけいわ
鬼腰掛岩(推定)
さいとうきた おだに
(西塔北尾谷地区, 比叡山延暦寺)

かつて、閻魔大王に呼ばれて地獄を訪れた天台座主院源^{いんげん}が帰る際に、彼を比叡山延暦寺へと送り届けるために、二人の鬼が遣わされたという伝説があります。その二人の鬼が腰掛けて休息をとったという伝説がある鬼腰掛岩^{おにのこしかけいわ}という岩が、比叡山延暦寺の西塔北尾谷地区^{さいとうきた おだに}にあったとされています。その鬼腰掛岩^{おにのこしかけいわ}だとおもわれる岩を見つけたので、そこまでの道のりと、そこから八瀬の里への道のりを、下記のような地図にしてみました。(下記の道のりをたどっていく様子や、鬼腰掛岩^{おにのこしかけいわ}とおもわれる岩などを撮影した動画は、つぎの URL でご覧いただけます。

<https://wisdommingle.com/?p=27610>)

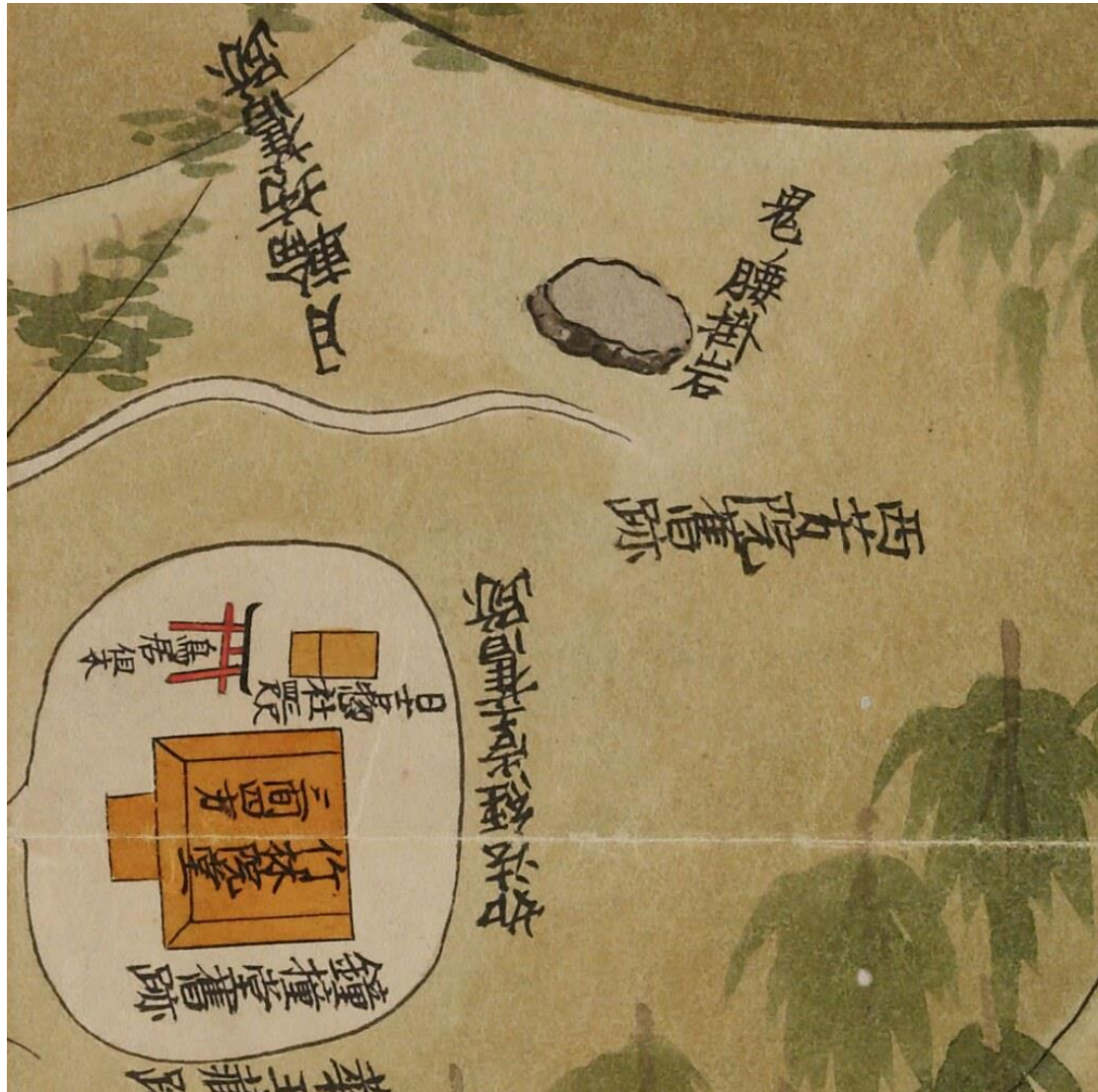


地図 3 ^{おにのこしかけいわ} 鬼腰掛岩への道のり
(八瀬と西塔地区を結ぶ北尾谷道)
^{やせさいとう} (八瀬と西塔地区を結ぶ北尾谷道)

^{おにのこしかけいわ} 鬼腰掛岩を探すために参考にしたのは、江戸時代中期に制作された、比叡山延暦寺の古地図である『^{さんもんさんとうきかもとそうえず}山門三塔坂本惣絵図』と、^{たけかくちよう}武覚超さんの『比叡山諸堂史の研究』に記載されている「堂舎僧坊分布図」と「比叡山の古道および諸堂分布図」の地図です。そこから、^{おにのこしかけいわ} 鬼腰掛岩のおおよその位置を推測して、その場所へ行ってみたところ、それとおもわれる岩を見つけました。その ^{おにのこしかけいわ} 鬼腰掛岩 (推定) がある場所のおおよその緯度経度は、35.074995, 135.829416 です。

『山門三塔坂本惣絵図』

下記の画像は、江戸時代中期に制作された、比叡山延暦寺の古地図である『山門三塔坂本惣絵図』の第2鋪のなかの、鬼腰掛岩が描かれている部分です。



鬼腰掛岩

『山門三塔坂本惣絵図』第2鋪(一部分)

上記の『山門三塔坂本惣絵図』の画像のなかに書かれている、「鬼腰掛岩」という文字の先頭の「鬼」の文字は、下記の画像のように、「角の無い鬼」の文字になっているようです。八瀬童子の祖先である鬼は、「角の無い鬼である」とされています。ですので、この「角の無い鬼」の文字は、八瀬童子の祖先である鬼(角の無い鬼)をあらわしているのかもしれませんが。



「^つ角の^な無^{おに}い鬼」の字
 (「^{おに}鬼^{のこし}腰^{かけ}掛^{いわ}岩」の「鬼」の字の部分)
 『^{さんもんさんとうさかもとそうえ}山門三塔坂本惣絵図』第2鋪(一部分)

下記の画像は、『^{さんもんさんとうさかもとそうえ}山門三塔坂本惣絵図』第2鋪の全体図です。



『^{さんもんさんとうさかもとそうえ}山門三塔坂本惣絵図』第2鋪(全体図)

なお、『^{さんもんさんとうさかもとそうえ}山門三塔坂本惣絵図』の古地図については、次の URL のページでくわしく紹介しています。「比叡山延暦寺の古地図『山門三塔坂本惣絵図』(1767 年、江戸時代中期)」

(<https://wisdommingle.com/?p=27558>)

『山門名所旧跡記』

ここからは、鬼腰掛岩^{おにのこしかけいわ}についての記述がある古文献などを紹介させていただきます。

『山門名所旧跡記^{さんもんめいしよきゅうせき き}』は、江戸時代中期の1744年(延享元年^{えんきやうがんねん})に撰述^{せんじゆつ}された、比叡山延暦寺の名所旧跡についての情報が記された文献です(武, 2008, p. 120)。

『山門名所旧跡記^{さんもんめいしよきゅうせき き}』の第1巻の「西塔分^{さいとう}」には、鬼腰掛岩^{おにのこしかけいわ}についての次のような記述があります(『天台宗全書 第24巻』, p. 228)。

鬼腰掛岩^{おにのこしかけいわ} 同前^{さいとうきた おだに}〔西塔北尾谷^{さいとうきた おだに}〕にあり
〔比叡山延暦寺^{ひえいざんえんりやくじ}の西塔北尾谷^{さいとうきた おだに}の〕西方院^{さいほういん}の院源座主^{いんげん ざす}、寛仁年中^{かんにんねんじゅう}〔平安時代中期^{かんにん}の寛仁時代^{かんにん}に〕、陰府^{いんぶ}〔地獄^こ〕の請い^{おもむ}に赴^{えん}きし時^ま、閻魔^{えんま}、二鬼^{つか}を遣^つわしてこれを送^{おく}る。その時の二鬼^{ふたき}、この岩^{いわ}に踞^{すわ}す〔腰掛^{こしかけ}ける〕。故^{ゆえ}に呼^よびて鬼^{おに}の腰掛^{こしか}け岩^{いわ}という。今^{いま}、八瀬^{やせ}の村民^{むらみん}、世^よに矢瀬童子^{やせどうじ}〔八瀬童子^{やせどうじ}〕と呼^よぶは、この二鬼^{ふたき}の裔^{すえ}〔末裔^{まつえい}〕なり。

『西塔堂舎並各坊世譜』

『西塔堂舎並各坊世譜^{さいとうどうしゃならびにかくぼうせいふ}』は、江戸時代中期の1713年～1714年(正徳3年^{しょうとく}～正徳4年^{しょうとく})に撰述^{せん}された、比叡山延暦寺^{ひえいざんえんりやくじ}の西塔地区^{さいとう}の堂舎^{どうしゃ}についての情報が記された文献です(武, 2008, p. 117)。

『西塔堂舎並各坊世譜^{さいとうどうしゃならびにかくぼうせいふ}』の「北尾^{きたお}」(西塔北尾谷地区^{さいとうきた おだに})の「大智院^{だいちいん}」の項目^{だい}ところには、鬼腰掛岩^{おにのこしかけ}についての次のような記述があります(『天台宗全書 第24巻』, pp. 152-153)。

大智院^{だいちいん}
旧西方院^{もとさいほういん}と号^{ごう}す。寛永中^{かんえいじゅう}〔江戸時代前期^{かんえい}の寛永時代^{かんえい}に〕、改^{あらた}めて松寿院^{しょうじゅいん}と名^なづく。元禄7年^{げんろく}〔江戸時代中期^{げんろく}の1694年に〕、また今^{いま}の名^{だいちいん}〔大智院^{だいちいん}〕に更^{あらた}む。座主^{ざす}〔天台座主^{てんだいざす}〕院源僧正^{いんげんそうじょう}の嘗^{かつ}て住^{じゅう}する所^{ところ}なり。相伝^{あいつた}う、寛仁中^{かんにんじゅう}〔平安時代中期^{かんにん}の寛仁時代^{かんにん}に〕、閻羅王^{えんらおう}〔閻魔大王^{えんまだいおう}〕、師^し〔院源^{いんげん}〕を陰府^{いんぶ}〔地獄^{じごく}〕に請^こい、法華^{ほっけ}を講読^{こうどく}せしむ〔法華經^{ほっけきやう}の講義^{こうぎ}をさせた〕。(或いは、伝^あえて法華^{ほっけ}〔法華經^{ほっけきやう}〕十^{じゅう}万^{まん}部^ぶ供養導師^{くようどうし}と為^なると云^いう。) 師^し〔院源^{いんげん}〕、因^ゆりて告^つげて曰^{いわ}く、「今^{いま}、適^{たまたま}具^{まつが}に脂獄^{しじよく}の苦報^{くほう}を觀^みる〔地獄^{じごく}におちた人^{ひと}があじわう苦^{くる}しみを見^みた〕。我^{われ}、人間^{じんかん}〔現世^{げんせい}〕に還^{かえ}るに、何^{なに}を以^{もつ}てか証^{あかし}と為^なさん。以^{もつ}て諸人^{しよじん}〔た^たくさん^{さん}の人^{ひと}〕に説^とき知^しらしめん」。冥王^{えんまだいおう}〔閻魔大王^{えんまだいおう}〕、すなわち、〔院源^{いんげん}の〕為^{ため}に一^{ひと}宝印^{ほういん}を授^{さづ}けて、且^{かつ}つ曰^{いわ}く、「若^もし、人^{ひと}、この印^{いん}を持^もてば、その人^{ひと}、設^{たと}い重^{おも}き咎^{とが}あれども、我^{われ}、当^{まさ}に方^{ほう}便^{べん}して、これ^{これ}を赦^{ゆる}すべし」。その印文^{いんもん}、版^{いた}に彫^ほりて伝^たえて、見^みるに在^あり。またその往^ゆくにも去^みて弥陀^{みだ}迎接^{ごうじよう}の聖像^{えんしやう}〔阿弥陀如来^{あみだにょらい}が来迎^{らいごう}する様^{よう}子^こを描^えいた阿弥陀聖衆^{あみだしやうじゆ}来迎^{らいごう}図^ず〕を奉^{たてまつ}る。(慧心僧都^{えしんそうず}〔惠心僧都源信^{えしんそうずげんしん}が〕手^{しゅ}写^{しゃ}するところ、迅雲^{じんうん}弥陀^{みだ}と名^なづく。) 以^{もつ}て冥界^{みやうかい}の衆生^{しゆじやう}を福^{ふく}す。その

像、初め本山〔比叡山延暦寺〕に在り。後、展転流傳して、今、〔比叡山の東側のふもとにある〕西教寺に在り。その縁 詳らかなること、梶井盛胤親王〔梶井門跡の盛胤法親王が〕筆せる像の記に見る。已にして、師〔院源〕、將に言に還らんとす。王〔閻魔大王〕、鬼卒の二人を発つ〔地獄の鬼を二人派遣した〕。護送の二鬼、すなわち輿を舁きて〔輿をかついで〕、頃刻にして〔しばらくして〕、坊に致し〔西方院まで院源を送り届けて〕、輿を階 下に放ちて〔輿を階段の下に放置して〕、石に抛りて、相憩う〔岩によりかかって、二人で一緒に休息をとった〕。その石、院〔西方院〕の旧址〔旧跡〕に在り。伝えて、鬼の腰掛石と云う。その二鬼、山下に留まりて、遂に孫子〔子孫〕を生む。すなわち、八瀬の奴童、皆その種〔子孫〕なり。この故に、奴童、当坊〔大智院(旧西方院)〕を以て、八瀬の本坊と称す。

『山門堂社由緒記』

『山門堂社由緒記』は、江戸時代中期の 1767 年(明和4 年)に撰述された、比叡山延暦寺の堂社についての情報が記された文献です(武, 2008, p. 120)。

『山門堂社由緒記』の巻第一の「北尾」(西塔北尾谷地区)の「西方院」の項目ところには、鬼腰掛岩についての次のような記述があります(『天台宗全書 第 24 巻』, p. 272)。

『山門堂社由緒記』の「西方院」の項目のところに書かれている内容は、前述の『西塔堂舎 並各坊世譜』の「大智院」の項目の記述内容から、後半部分の内容などの一部を省略した内容になっています。ですので、『山門堂社由緒記』の記述は、簡略版のようなものであるようです。

西方院 旧跡

此の院は、座主〔天台座主〕院源僧正、嘗て住する所なり。相伝えて曰く、寛仁中〔平安時代中期の寛仁時代に〕、閻羅王〔閻魔大王〕、師〔院源〕を陰府〔地獄〕に請い、法華を講読せしむ〔法華經の講義をさせた〕。師〔院源〕、因りて告げて曰く、「今、適 眞に地獄の苦報を觀る〔地獄におちた人があじわう苦しみを見た〕。我、人間〔現世〕に還るに、何を以てか証と為さん。以て諸人〔たくさんの人〕に説き知らしめん」。冥王〔閻魔大王〕、乃ち、〔院源の〕為に 一 宝印を授く。且つ曰く、「若し、人、是の印を持せば、其の人、重き咎有れども、我、当に方便して、之を赦すべし」。其の印文、版に彫りて伝えて、見るに在り。師〔院源〕、將に言いて還らんとす。王〔閻魔大王〕、鬼卒の二人を発つ〔地獄の鬼を二人派遣した〕。護送の二鬼、乃ち輿を舁きて〔輿をかついで〕、頃刻にして〔しばらくして〕、坊に致し〔西方院まで院源を送り届けて〕、輿を 階 下に放ちて〔輿を階段の下に放置して〕、石に抛りて、相憩う〔岩によりかかって、二人で一緒に休息をとった〕。其の石、今に在り。伝えて、鬼の腰掛石と云う。其の鬼、山下に留まりて、遂に子孫を生

む。即ち、八瀬の奴童、皆其の種〔子孫〕なり。是の故に、奴童、当坊〔大智院(旧西方院)]を以て、八瀬の本坊と称す。今の大智院、是れなり。

『遠碧軒記』

下記で引用している『遠碧軒記』は、江戸時代の儒学者である黒川道祐が、自身の膨大な雑記や随筆をまとめた『遠碧軒随筆』を、江戸時代中期の1756年(宝暦6年)に、公家の難波宗建が拔書きし、部類したものです(『日本随筆大成 第1期 10』, p. 1(解題))。ちなみに、「遠碧軒」というのは、黒川道祐の雅号(通称)です。

『遠碧軒記』の「上之一」の矢瀬郷〔八瀬郷〕の項目には、下記のような記述があります(『日本随筆大成 第1期 10』, pp. 15-16)。下記の文章では、八瀬童子の特徴的な髪形は、衿羯羅童子と制多迦童子の、二人の天童(護法童子)の髪形に似せたものだ、とされています。鬼腰掛岩の伝説に登場する二人の鬼も、比叡山延暦寺の代表者である天台座主という仏教僧に仕えているという点では、護法童子にちかいものではないかとおもいます。ですので、鬼腰掛岩の伝説に登場する二人の鬼と、衿羯羅童子と制多迦童子の二人の天童には、なにか通じるものがあるのかもしれない。

矢瀬郷〔八瀬郷〕高二百七十石、施薬院、弘文院等の領あり。また大原の寂光院の領、御朱印三十石の内も、八瀬より少し納む。

八瀬に百十七軒、古き家あり。この者ども、小法師のせんのと云う類の名を付け、この百十七軒の者の内より、年老を三十六扱で、これがみな国名を付く。三十六人かければ、また替えてその内へ入る。これが鎮守氏神の天神〔八瀬天満宮〕の事に預る。侍分にても〔侍の身分であったとしても〕、入人〔入り婿〕は三十六人の内へ入れず。八瀬祭のとき、三十六人は、浄衣白張を着す。その外は、かちん〔褐色。濃い藍色〕に子持筋を付して、蘇袍〔素袍のことか?〕を着す。

扱、この所は、天神の〔八瀬天満宮〕の祭神である菅原道真が、阿闍梨屋敷へ手習に九才より通い給うとき、この在所にて、昼の休息所なり。所の者〔八瀬の住人〕、貧窮の体を見給い、釜風呂をして病人をも治し、「渡世にせよ」〔この仕事で生活していきなさい〕との事なり。それにより、十才の形を束帯に作りて、天神〔菅原道真〕を祭る。また、山門〔比叡山延暦寺〕の下故に、山の鎮守、山王二の宮の社を合せ祭る。祭日、先へ出で、神輿は天神、跡の小さきは二の宮なり。三十六人の内、一人ずつ社人を務む。毎年大晦日が交替なり。 中略

さて、八瀬の人の髪長きは、世上には、「清見原 天皇〔天武天皇が〕、しばらく此所に御入故、その末」という。これは謬伝なり。慧心〔恵心僧都源信〕の生身にて冥途へ参れし時、こんがら・せいたか〔衿羯羅童子と制多迦童子〕の二天童現じて供奉す。冥官、「この者どもは何者ぞ」とあれば、「しかじか」と答え給う。奇代の事なり。一人は此方に留置たきとあり。其代には安楽花の実を遣うべしとて、三粒与う。これを種えて菩提を願うものは、即滅無量罪と申す。携え帰りて、安楽寺の庭に植え給う。今に三本ありて枯れず。葉の裏に実なりて、菩提樹子に似たり。このこんがら・せいたか〔衿羯羅童子と制多迦童子〕の天童の体を似せて、髪を長く、童子の体を表すという。

八瀬の鬼神「とんたい」(小たんたい)と御弓式

余談ですが、鬼ヶ洞や鬼腰掛岩以外にも、八瀬には鬼にまつわる伝承があります。それは、「とんたい」(または、「小たんたい」という鬼神についての伝承です。その伝承の内容は、「昔、「とんたい」(「小たんたい」という鬼神が、常に八瀬の人々を悩ませていたので、天照太神・八幡大菩薩、春日大明神の三柱の神々が、弓矢を射てこの鬼神を退治した」というような内容です。その伝承がもとになって、「弓始」(御弓式)という儀式が年中行事としておこなわれるようになったそうです。

江戸時代中期の1716年(正徳6年)に成立した『八瀬記』には、「弓始」(御弓式)の儀式のことが、次のように記されています(『八瀬童子会文書』, p. 70)。なお、『八瀬童子会文書』に所収されている『八瀬記』の記述では、鬼神の名称が「小たんたい」になっています。

とうむらしよやくおぼえがき
当村諸役覚書

ゆみはじめ
弓始

毎年正月廿日、天神の社〔八瀬天満宮〕へ、村中、衣装を着し出ずる。左座・右座の両座より、大鏡餅十居え、一居え五斗〔約9リットル〕ずつ、小鏡餅廿五居え、一居え三合〔約0.5リットル〕ずつ、神前に居え、恵方の方に、桧の薄板、網代に組み、五尺〔約1.5メートル〕にして、星黒の的を立て、神主、一手射る。次に、神主の子、素襖を着し、本弓に鶴〔トキ〕の羽の矢を取り添え、神主に渡す。神主、受け取り、逆さまに、また、一手射る。次に、村の子、二人出でて、本弓にて一手射る。この起りは、昔、「小たんたい」という鬼神、常に八瀬の人を悩ますゆえに、天照太神・八幡大菩薩・春日大明神の三社の神、射さしめ給うのよし、天下泰平の御祈り、毎年これを執り行ふ。

また、上記の「弓始」(御弓式)と関連があるとおもわれる「花の弓」という儀式についても、『八瀬記』のなかに記されています(『八瀬童子会文書』, p. 70)。

花の弓

毎年三月、躑躅の盛りに、天神の旅所〔八瀬天満宮の御旅所の〕南の方に、桧の薄板を網代に組み、三尺〔約 90 センチメートル〕にして、星白の的を立て、年十六七のもの四人、これを射る。その後は、子共あらそいて射る。射終わって、的の吊り糸を切り落とし、的のおもてを十文字に切り、「鬼は川へ流し候う」と囃し立て、川へ流す。正月弓始の的は、村鎮めとて、星黒し。本の弓は、なお霊残るとて、星白し。

これらの「弓始」(御弓式)や、「花の弓」について、池田昭さんは、『天皇制と八瀬童子』で、次のように述べておられます(池田, 1991, pp. 48-49; 犬丸, 2012, pp. 82-84)。なお、下記の記述では、鬼神の名称が「とんたい」になっています。

この呪的カリスマの所有者、神殿〔こうどの。一年神主〕は、次の宗教行為も行う。

〔中略〕

正月二〇日の御弓の式。

神殿〔こうどの〕は、春祭の場合と同様に、頬紅をし、神が乗り移ったもとで鬼を射、天下泰平を祈る。

『八瀬記』には、「昔、『とんたい』と云う鬼神常に八瀬の人を悩ます故に天照大神、八幡大菩薩、春日大明神この三社の神射さしめ給ふのよし、天下泰平の御いの里〔御祈り〕毎年これをとり行ふ」とあって、この御弓の式は柳田国男氏の指摘とは相違し年占いではなく、むしろ祓除の呪術である。

現在では行われていないが、『八瀬記』によると、「花の弓」と称し、三月のつつじの季節に子供らは「花を霊のこるとて……」と考え、鬼の的をつくり、これを射、その後の的を十文字に切り、「鬼は川へながしたとはやしたて川へ流す」のであった。これは、神殿〔こうどの〕が主宰していたかどうか分からないが、次に述べる安楽花〔やすらいはな〕の伝承と同一の意味をもったものである。

ちなみに、「御弓式」(弓始)の儀式は、現在でも毎年 1 月 20 日におこなわれているようです。写真家の横山健蔵さんが、京都の年中行事の祭りや儀式を撮影した写真集のなかに、八瀬の御弓式において弓を射る儀式の様子を撮影した写真や、そのほかの八瀬における儀式の写真的な写真も収録されています(横山, 1994 b, p. 20; 横山, 1994 a, photo no. 39)。

おわりに

ここまで、酒吞童子や、鬼童丸(鬼同丸)や、八瀬童子の祖先の鬼にゆかりのある、鬼ヶ洞という洞窟や、鬼腰掛岩という岩について紹介してきました。もし、興味があれば、あなたもぜひ、酒

吞童子や鬼や八瀬童子にゆかりのあるこれらの場所に、足をはこんでみていただければとおもいます。(※本稿の最新版は、つぎの URL でご覧いただけます。

<https://wisdommingle.com/?p=27610>)

引用文献・参考文献

- 秋里籬島 [編], 竹原春朝斎 [挿絵], 『都名所図会』, 増補京都叢書刊行会 [編], (1934), 『京都叢書 第 11 増補』, 増補京都叢書刊行会.
- 朝日新聞社 [編] (1994) 『朝日日本歴史人物事典』, 朝日新聞社.
- 池田昭 (1963) 「鬼の子孫の一解釈 : 宗教社会学的考察」, 日本仏教研究会, 『日本仏教』, 17 : 15-32.
- 池田昭 (1991) 『天皇制と八瀬童子』, 東方出版.
- 犬丸治 (2012) 『「菅原伝授手習鑑」精読 : 歌舞伎と天皇』, 岩波現代文庫, 岩波書店.
- 岩松文代 (2003) 「「都名所図会」にみる京都近郊山村の名所性 : 近世京都から伝えられた山村観」, 日本林学会, 『日本林学会誌』, 85(2) : 114-120.
- 梅原猛 (2001) 『京都発見 3 (洛北の夢)』, 新潮社.
- 北村季吟 『菟藝泥赴』, 増補京都叢書刊行会 [編], (1934), 『京都叢書 第 5 巻 増補』, 増補京都叢書刊行会.
- 京都史蹟会 [編] (1979) 『林羅山文集 上巻』, ペリかん社.
- 京都新聞社 [編] (1980) 『京の北山 : 史跡探訪』, 京都新聞社.
- 京都府愛宕郡役所 [編] (1911) 『京都府愛宕郡村志』.
- 京都文化博物館 [編], 京都市歴史資料館 [編], ニューリー株式会社 [編], (2012), 『八瀬童子 : 天皇と里人 : 重要文化財指定記念』, 京都文化博物館.
- 黒川道祐 [著], 難波宗建 [編], 『遠碧軒記』, 日本随筆大成編集部 [編], (1975), 『日本随筆大成 第 1 期 10』, 吉川弘文館.
- 黒川道祐 「北肉魚山行記」, 『近畿歴覧記』, 増補京都叢書刊行会 [編], (1934), 『京都叢書 第 3 増補』, 増補京都叢書刊行会.
- 黒川道祐 『雍州府志』, 立川美彦 [編], (1997), 『訓読雍州府志』, 臨川書店.
- 丈愚 『京師巡覧集』, 増補京都叢書刊行会 [編], (1934), 『京都叢書 第 4 増補』, 増補京都叢書刊行会.
- 武覚超 (2008) 『比叡山諸堂史の研究』, 法藏館.
- 谷北兼三郎 [編] (1925) 『八瀬大原の栞』, 無竹庵院.
- 林羅山 『林羅山詩集』, 京都史蹟会 [編], (1979), 『林羅山詩集 上巻』, ペリかん社.
- 林羅山(道春) [編], 林鶯峰(林春斎) [編], 『本朝通鑑』, 林昇 [校訂], 渡辺約郎 [訓解], (1875), 『本朝通鑑 : 標記 巻第 29』, 大槻東陽.

- 林羅山(林忠) [編], 林鷺峰(林恕) [編], 『本朝通鑑』, 国書刊行会 [編], (1919), 『本朝通鑑 第六』, 国書刊行会.
- 源武好 『山城名勝志』, 近藤瓶城 [編], (1907), 『史籍集覧 22 改定』, 近藤出版部.
- 源武好 『山城名勝志』, 増補京都叢書刊行会 [編], (1934), 『京都叢書 第 8 増補』, 増補京都叢書刊行会.
- 源武好 『山城名勝志』, 野間光辰 [編], 新修京都叢書刊行会 [編], (1994), 『新修京都叢書 第 14 卷 2 版』, 臨川書店.
- 横山健蔵 (1994 a) 『京都祭の魅力 1』, 京都書院.
- 横山健蔵 [著], 芳井敬郎 [著], (1994 b), 『京の祭』, 佼成出版社.
- 若尾五雄 (1981) 『鬼伝説の研究 : 金工史の視点から』, 大和書房.
- 『西塔堂舎並各坊世譜』, 天台宗典刊行会 [編], (1974), 『天台宗全書 第 24 巻』, 第一書房.
- 『山門堂社由緒記』, 天台宗典刊行会 [編], (1974), 『天台宗全書 第 24 巻』, 第一書房.
- 『山門名所旧跡記』, 天台宗典刊行会 [編], (1974), 『天台宗全書 第 24 巻』, 第一書房.
- 『出来斎京土産』, 増補京都叢書刊行会 [編], (1934), 『京都叢書 第 4 増補』, 増補京都叢書刊行会.
- 『八瀬記』, 京都市歴史資料館 [編] (2000) 『八瀬童子会文書』, 叢書・京都の史料, 京都市歴史資料館.

地図画像の出典

- 地図 1、地図 2、地図 3 は、国土地理院「地理院地図」の、地理院タイル「全国最新写真(シームレス)」の画像を、加工・編集して使用しています。地理院タイル一覧ページ:
<https://maps.gsi.go.jp/development/ichiran.html> .